

ニ八重ト云半物立テリ、

〔榮花物語四見はてぬ夢〕そのとし三〇正暦のうちに、はせでらにまいらせ給ぬ〇東三條院藤原詮子御どもに

は、略中としごろさぶらへるも、さらぬも、あま十人ばかりさぶらふ、みゆきとてわらはにてさぶ

らびしが、御どもにあまになりにはかばりはだどつけさせ給へり、わらはべとしごろつかはせ

給はざりしも、いまぞおほくまいりあつまりたれば、ほめき、すいきはなこ、まきみなど、さまざま

つけさせ給へり、

〔榮花物語八はつ花〕中ぐう藤原彰子の御ありさまとりくくにみえさせ給〇中いにしへのきさ

きは、わらはつかはせ給はざりけれど、いまの世は御このみにて、さまざまつかはせ給、やどりき、

やすらひなどいふが、ちるさくはあらぬが、かみながうやうだいおかしげにて、かざみばかりを

ぞきさせ給へる、

〔榮花物語十六本のしづく〕一品宮〇三條皇女の御かたのわらはは、おかしき、やさしき、ちいさき、大き

さ、めでたきなど、さまざまつけさせ給へり、

〔源氏物語五若紫〕すゞめの子を、いぬきかにかしつる、ふせごのうちにてこめたりつるものをとて、い

どくちおしと思へり、

〔源氏物語湖月抄五若紫〕いぬき 犬公孟上東門院の上童に此名あり、榮花物語に見えたり、あて

きなれきなどあり、きは公師の字也、いぬきみと云事也、

〔類聚名物考姓氏八〕き 何き 童女の名に何きといふは、君の略語なりといへり、落窪物語にあてき、源氏物語の犬きなどの

類也、

〔十訓抄十一〕宇治入道殿にさぶらひける、うれしきこそと云はした物を、顯輔卿けさうしけるに、